

ひとふさ  
一房の葡萄

有島武郎

—

僕は小さい時に絵を描くことが好きでした。僕の通っていた学校は横浜の山の手という所にありましたが、そこいらは西洋人ばかり住んでいる町で、僕の学校も教師は西洋人ばかりでした。そしてその学校の行きかえりにはいつでもホテルや西洋人の会社などがならんでいる海岸の通りを通るのでした。通りの海添いに立って見ると、真青な海の上に軍艦だの商船だのが一ぱいならんでいて、煙突から煙の出ているのや、櫓から櫓へ万国旗をかけたわたしたのやがあつて、眼がいたいように綺麗でした。僕はよく岸に立ってその景色を見渡して、家に帰ると、覚えていられるだけ出来るだけ美しく絵に描いて見ようとしました。けれどもあの透きとおるような海の藍色と、白い帆前船などの水際近くに塗つてある洋紅色とは、僕の持っている絵具ではどうしてもうまく出せませんでした。いくら描いても描いても本當の景色で見るとな色には描けませんでした。

10

ふと僕は学校の友達の手持っている西洋絵具を思い出しました。その友達は矢張り西洋人で、しかも僕より二つ位年齢が上でしたから、身長は見上げるように大きい子でした。ジムというその子の持っている絵具は舶来の上等のもので、軽い木の箱の中に、十二種の絵具が小さな壘のように四角な形にたためられて、二列にならんでいました。どの色も美しかったが、とりわけて藍と洋紅とは喫驚するほど美しいものでした。ジムは僕より身長が高いくせに、絵はずっと下手でした。それでもその絵具をぬると、下手な絵さえがなんだか見方がえるように美しく見えるのです。僕はいつでもそれを羨しいと思つていました。あんな絵具さえあれば僕だって海の景色を本當に海に見えるように描いて見せるのになあと、自分の悪い絵具を恨みながら考えました。そうしたら、その日からジムの絵具がほしくてほしくてたまらなくなりました。けれども僕はなんだか臆病になつてパパにもママにも買つて下さいと願う気になれないので、毎日々々その絵具のことを心の中で思いつけるばかりで幾日か日がたちました。

5

今ではいつの頃だったか覚えてはいませんが秋だったのでしよう。葡萄の実が熟していたのですから。天気は冬が来る前の秋によくあるように空の奥の奥まで見すかされそうに曇れわたつた日でした。僕は先生と一緒に弁当をたべましたが、その楽しみな弁当の最中でも僕の心はなんだか落着かないで、その日の空とはうらは

15

櫓…帆柱。船で、帆を張る柱のこと。マスト。  
万国旗…運動会などのかざりにつかう。世界中の国の小さな国旗をならべたもの。「ばんこくき」ともいふ。  
帆前船…帆に受ける風力を利用して航する船。  
洋紅色…カルミン。「チニール」。鮮麗な紅色の顔料。

舶来…外国で作つた物を船などで運んでくること。またその品物

らに暗かったのです。僕は自分一人で考えこんでいました。誰かが気がついて見たら、顔も屹度青かったかも知れませんが。僕はジムの絵具がほしくてほしくてたまらなくなってしまうのです。胸が痛むほどほしくなってしまうのです。ジムは僕の胸の中で考えていることを知っているにちがいないと思って、そっとその顔を見ると、ジムはなんにも知らないように、面白そうに笑ったりして、わきに坐っている生徒と話をしているのです。でもその笑っているのが僕のことを知っているようにも思えるし、何か話をしているのが、「いまに見ろ、あの日本人が僕の絵具を取るにちがいないから。」と喋っているようにも思えるのです。僕はいやな気持ちになりました。けれどもジムが僕を疑っているように見えれば見えるほど、僕はその絵具がほしくてならなくなるのです。

## 二

僕はかわいい顔はしていたかも知れないが体も心も弱い子でした。その上臆病者で、言いたいことも言わずにすますような質でした。だからあんまり人からは、かわいがられなかったし、友達もない方でした。昼御飯がすむと他の子供達は活潑に運動場に出て走りまわって遊びはじめましたが、僕だけはなおさらその日は変に心が沈んで、一人だけ教場に這入っていました。そとが明るいだけに教場の中は暗く

なって僕の心の中のような感じでした。自分の席に坐っているながら僕の眼は時々ジムの卓の方に走りました。ナイフで色々な色を書きが彫りつけてあって、手垢で真黒になっているあの蓋を揚げると、その中に本や 雑記帳や石板と一緒にあって、鉛のような木の色の絵具箱があるんだ。そしてその箱の中には小さい墨のような形をした藍や洋紅の絵具が……僕は顔が赤くなったような気がして、思わずそっぽを向いてしまつのです。けれどもすぐ又横眼でジムの卓の方を見ないではいられませんでした。胸のところごとごととして苦しい程でした。じっと坐っているながら夢で鬼にでも追いかけられた時のように気ばかりせかせかしていました。

教場に這入る鐘がかんかんと鳴りました。僕は思わずぎょっとして立上りました。生徒達が大きな声で笑ったり叫んだりしながら、洗面所の方に手を洗いにいかけて行くのが窓から見えました。僕は急に頭の中が氷のように冷たくなるのを気味悪く思いながら、ふらふらとジムの卓の所に行って、半分夢のようにその蓋を揚げて見ました。そこには僕が考えていたとおり雑記帳や鉛筆箱とまじって見覚えのある絵具箱がしまっていました。なんのためだか知らないが僕はあっちこちを見廻してから、誰も見ていないなと思うと、手早くその箱の蓋を開けて藍と洋紅との二色を取上げるが早いかポケットの中に押し込みました。そして急いでいつも整理して

教場：学校で授業をする室。教室。

雑記帳：こまごまとしたことを書きしるした手帳。ノートブック。

先生を待っている所に走って行きました。

僕達は若い女の先生に連れられて教場に這入り 銘々の席に坐りました。僕はジムがどんな顔をしているか見たくってたまらなかったけれども、どうしてもそっちの方をふり向くことができませんでした。でも僕のしたことを誰も気のついた様子がないので、気味が悪いような、安心したような心持ちでいました。僕の大好きな若い女の先生の仰ることなんかは耳に這入りは這入ってもなんのことだかちっともわかりませんでした。先生も時々不思議そうに僕の方を見ているようでした。

僕は然し先生の眼を見るのがその日に限ってなんだかいやでした。そんな風で一時間がたちました。なんだかみんな 耳こすりでもしているようだと思いつながら一時間がたちました。

教場を出る鐘が鳴ったので僕はほっと安心して溜息をつきました。けれども先生が行ってしまうと、僕は僕の級で一番大きな、そしてよく出来る生徒に「ちよっこうちにお出で」と肱の所を掴まれました。僕の胸は宿題をなまけたのに先生に名を指された時のように、思わずとぎんと震えはじめました。けれども僕は出来るだけ知らない振りをしていなければならぬと思って、わざと平気な顔をしたつもりで、仕方なしに運動場の隅に連れて行かれました。

「君はジムの絵具を持っているだろう。ここに出し給え。」

そういつてその生徒は僕の前に大きく広げた手をつき出しました。そういわれると僕はかえって心が落着いて、

「そんなもの、僕持ってやしない。」「と、ついでたらめをいつてしまいました。そうすると三四人の友達と一緒に僕の側に来っていたジムが、

「僕は昼休みの前にちゃんと絵具箱を調べておいたんだよ。一つも失くなつてはいなかったんだよ。そして昼休みが済んだら二つ失くなっていったんだよ。そして休みの時間に教場にいたのは君だけじゃないか。」「と少し言葉を震わしながら言いかえしました。

僕はもう駄目だと思つと急に頭の中に血が流れこんで来て顔が真赤になったようでした。すると誰だったかそこに立っていた一人がいきなり僕のポケットに手をさし込もうとしました。僕は一生懸命にそうはさせまいとしましたけれども、多勢に無勢で逆も叶いません。僕のポケットの中からは、見る見るマール球(今)のビー球の事です(や鉛のメン)などと一緒に二つの絵具のかたまりが掴み出されてしまいました。「それ見る」といわんばかりの顔をして子供達は憎らしそうに僕の顔を睨みつけました。僕の体はひとりでにぶるぶる震えて、眼の前が真暗になるよう

銘々：そこにいる人たちのひとり

耳こすり：ひとの耳もとで小声にささやくこと。みみうち。あてこすり。皮肉

多勢に無勢：少数ではとても多数の相手になれないこと。

でした。いいお天気なのに、みんな休時間(やすみじかん)を面白そうに遊び廻(まわ)っているのに、僕(ぼく)だけは本当に心からしおれてしまいました。あんなことをなせしてしまったんだろつ。取りかえしのつかないことになってしまった。もう僕は駄目(だめ)だ。そんなに思うと弱虫(よわむし)だった僕は淋(さび)しく悲しくなつて来て、しくしくと泣き出してしまいました。

「泣いておどかしたつて駄目だよ」とよく出来る大きな子が馬鹿(ばか)にするような憎みきつたような声で言つて、動くまいとする僕をみんなで寄(よ)つてたかつて二階に引張(ひきち)つて行くつとしました。僕は出来るだけ行くまいとしたけれどもとうとう力まかせに引きずられて階子段(はしこだん)を登らせられてしまいました。そこに僕の好きな受持ちの先生の部屋(へや)があるのです。

やがてその部屋の戸をジムがノックしました。ノックするとは這入(はい)つてもいいかと戸をたたくことなのです。中からはやさしく「お這入り」という先生の声が聞こえました。僕はその部屋に這入る時ほどいやだと思つたことはまたありません。

何か書きものをしていた先生はどやどやと這入つて来た僕達を見ると、少し驚いたようでした。が、女の癖(くせ)に男のように頸(くび)の所でぶつりと切つた髪の毛を右の手で撫(な)であげながら、いつものとおりのやさしい顔をこちらに向けて、「一寸首(うしろ)をかじげただけで何の御用(ごよう)という風をしなさいました。そうするとよく出来る大きな子が前

に出て、僕がジムの絵具を取つたことを委(く)しく先生に言いつけました。先生は少し曇(くも)つた顔付きをして真面目(まじめ)にみんなの顔や、半分泣きかかっている僕の顔を見くらべていなさいましたが、僕に「それは本当ですか。」と聞かれました。本当(まこと)だけれども、僕がそんないやな奴(やつ)だということはどうしても僕の好きな先生に知られるのがつらかつたのです。だから僕は答える代りに本当に泣き出してしまいました。

先生は暫(しば)く僕を見つめていましたが、やがて生徒達(せいとだ)に向つて静かに「もういつてもよろこびます。」といつて、みんなをかえしてしまわれました。生徒達は少し物足(たり)らなそうにどやどやと下(した)に降りていつてしまいました。

先生は少しの間なんとも言わずに、僕の方も向(む)かずに自分の手の爪(つま)を見つめていましたが、やがて静かに立つて来て、僕の肩(かた)の所を抱(だ)きすくめるようにして「絵具はもう返(かへ)しましたか。」と小さな声で仰(あ)いました。僕は返(かへ)したことをすっかり先生に知(し)つてもらいたいので深々(ふかふか)と頷(うなず)いて見せました。

「あなたは自分のしたことをいやなことだつたと思つていますか。」

もう一度そう先生が静かに仰つた時には、僕はもうたまりませんでした。ぶるぶると震えてしかたがない唇(くちびる)を、噛(か)みしめても噛(か)みしめても泣声(なみこゑ)が出て、眼からは涙(なみ)がむやみに流れて来るのです。もう先生に抱かれたまま死んでしまいたいような心

持ちになってしまいました。

「あなたはもう泣くんじゃない。よく解つたらそれでいいから泣くのをやめましよう、ね。次ぎの時間には教場に出ないでもよろしいから、私のお部屋に入らっしゃい。静かにしてここに入らっしゃい。私が教場から帰るまでここに入らっしゃいよ。いい。」と仰りながら僕を長椅子に坐らせて、その時また勉強の鐘がなったので、机の上の書物を取り上げて、僕の方を見ていられましたが、二階の窓まで高く這い上つた葡萄蔓から、一房の西洋葡萄をもぎとって、しくしくと泣きつづけていた僕の膝の上にそれをおいて静かに部屋を出て行きなさいました。

### 三

一時がやがややかましかつた生徒達はみんな教場に這入って、急にしんとするほどあたりが静かになりました。僕は淋しくって淋しくってしようがない程悲しくなりました。あの位好きな先生を苦しめたかと思うと僕は本当に悪いことをしてしまったと思いました。葡萄などは逆も喰べる気になれないでいつまでも泣いていました。

ふと僕は肩を軽くゆすぶられて眼をさました。僕は先生の部屋でいつの間にか泣寝入りをしていたと見えます。少し痩せて身長の高い先生は笑顔を見せて僕を見おろしていられました。僕は眠つたために気分がよくなって今まであつたことは忘れてしまって、少し恥しそうに笑いかえしながら、慌てて膝の上から這り落ちそうになっていた葡萄の房をつまみ上げましたが、すぐ悲しいことを思い出して笑いも何も引込んでしまいました。

「そんなに悲しい顔をしなくてもよろしい。もつみんなは帰ってしまいましたから、あなたはお帰りなさい。そして明日はどんなことがあっても学校に来なければいけませんよ。あなたの顔を見ないと私は悲しく思いますよ。屹度ですよ。」

そういつて先生は僕のカバンの中にそつと葡萄の房を入れて下さいました。僕はいつものように海岸通りを、海を眺めたり船を眺めたりしながらつまらなく家に帰りました。そして葡萄をおいしく喰べてしまいました。

けれども次の日が来ると僕は中々学校に行く気にはなれませんでした。お腹が痛くなればいいと思ったり、頭痛がすればいいと思ったりしたけれども、その日に限つて虫歯一本痛みもしないのです。仕方なしにいやいやながら家は出ましたが、ぶらぶらと考えながら歩きました。どうしても学校の門を這入ることは出来ないように思われたのです。けれども先生の別れの時の言葉を思い出すと、僕は先生の顔だけはなんと見たくてしかたがありませんでした。僕が行かなかつたら先生は

屹度悲しく思われるに違いない。もう一度先生のやさしい眼で見られたい。ただその一事があるばかりで僕は学校の門をくぐりました。

そつしたらどうでしょう、先ず第一に待ち切っていたようにジムが飛んで来て、僕の手を握ってくれました。そして昨日のことなんか忘れてしまったように、親切に僕の手をひいてどきまぎしている僕を先生の部屋に連れて行くのです。僕はなんだか訳がわかりませんでした。学校に行ったらみんなが遠くの方から僕を見て、「見る泥棒の嘘つきの日本人が来た」とでも悪口をいうだろうと思っていたのにこんな風にされると気味が悪い程でした。

二人の足音を聞きつけてか、先生はジムがノックしない前に、戸を開けて下さいました。二人は部屋の中に這入りました。

「ジム、あなたはいい子、よく私の言ったことがわかってくれましたね。ジムはもうあなたからあやまって貰わなくてもいいと言っています。二人は今からいい友達になればそれでいいんです。二人とも上手に握手をなさい。」と先生はここにしながら僕達を向い合せました。僕はでもあんまり勝手過ぎるようでもじもじしていますと、ジムはいそいそとぶら下げている僕の手を引張り出して堅く握ってくれました。僕はもつなんといいってこの嬉しさを表せばいいのかわらないで、唯恥しく

笑つ外ありませんでした。ジムも気持よさそうに、笑顔をしていました。先生はここにしながら僕に、

「昨日の葡萄はおいしかったの。」と問われました。僕は顔を真赤にして、「ええ」と白状するより仕方ありませんでした。

「そんなら又あげまじょつね。」  
そついつて、先生は真白なリンネルの着物につつまれた体を窓からのび出させて、葡萄の一房をもぎ取って、真白い左の手の上に粉のふいた紫色の房を乗せて、細長い銀色の鋏で真中からぶつりと二つに切って、ジムと僕とに下さいました。真白い手の平に紫色の葡萄の粒が重って乗っていたその美しさを僕は今でもはっきりと思い出すことが出来ます。

僕はその時から前より少しいい子になり、少しはにかみ屋でなくなったようです。それにしても僕の大好きなあのいい先生はどこに行かれたでしょう。もう二度とは遇えないと知りながら、僕は今でもあの先生がいたらなあと思います。秋になるといつでも葡萄の房は紫色に色づいて美しく粉をふきますけれども、それを受けた大理石のような白い美しい手はどこにも見つかりません。

リンネル…アマの  
繊維であった織物。  
リネン。

大理石…石灰(せっ  
かい)岩が地下で変  
化して、結晶して  
できた岩石。建築  
や彫刻などに使